

作家を目指す君に

修業時代と君へのメッセージ



公募ガイドも創刊 28 年目を迎え、「公募ガイドを見て応募した」「デビュー前は隅から隅まで読んでいた」などと言われることが多くなりました。そんな方々を公募ガイド出身作家とってはおこがましいですが、本誌を経由してプロになった作家は数えきれないほどいます。

今回は皆さんの先輩であるそんな作家の中から、石田衣良さん、山本文緒さん、高野和明さん、乃南アサさんに取材し、作家の修業時代と、作家を目指す皆さんへのメッセージをお伺いしました。2013 年が明けました。今年は皆さんが、公募ガイド出身作家になってください。

撮影 神崎安理（上・石田衣良）／棚橋亮（中央右・乃南アサ）／賀地マコト（下・山本文緒）



石田 衣良

自分が一つのジャンルになる



石田衣良 (いしだ・いら) 広告制作会社に勤務したあと、33歳でフリーランスのコピーライターとなる。'97年「池袋ウエストゲートパーク」で第36回オール讀物推理小説新人賞受賞。'03年「4 TEEN」で第129回直木賞受賞。'06年「眠れぬ真珠」で第13回島清恋愛文学賞受賞。「夜の桃」「明日のマーチ」「6TEEN」など著書多数。

ジャンルにはこだわらない

——石田先生は公募ガイドを見て新人賞に応募されたそうですが、どんな賞に出されましたか。

小説を書くかと思った当初は、自分が何を書けるかわからなかったため、公募ガイドを見て手近な小説の新人賞に丸をつけて書いていきました。日本ホラー小説大賞、朝日新人文学賞、小説現代新人賞、オール讀物推理小説新人賞、翌年の日本ファンタジーノベル大賞と次々に応募していった感じです。

——作品のジャンルがバラバラですね。賞の分析はされましたか。

特別な分析はしていません。向き不向きがあるだろうし、まずはあれこれ書いて応募してみた感じです。

——応募された賞のうち、3作品が最終選考に残ったそうですが、その理由はなんだと思われませんか。

30年間の蓄積があったからじゃないでしょうか。7歳の頃からずっと小説家になりたいと思って、本を読んで、考えて、文章の練習もしていた。中学、高校時代は、1日に2〜3冊ペースで読んでいましたから、気づかないうちに書きあげることができていたんだと思います。

——36歳で小説家になることを実行に移すわけですが、何かきっかけが？

「CREA」という雑誌の占いに、「これから2年間、期日を切って何か真剣に自分の中ものを出して仕事をするとよい」とあったので、これはもう小説を書くしかないなど。

——36歳でデビューということについてはどう思われますか。

小説は子どもの仕事ではないので、いろいろな経験をして、大人になってからデビューしたほうがいいですね。直木賞を獲ったとき、「君は何歳だ」と聞かれ、43歳と答えると、ちょうどいいと言われました。直木賞を受賞すると注目が殺到するので、あまり早く受賞すると引き出しがなくてつぶれてしまいます。

——オール讀物推理小説新人賞の受賞作

「池袋ウエストゲートパーク」はミス터리ですが、それまでに書かれた作品と比べて違いはありましたか。

それはないですね。ミス터리だからといって特別に思わないほうがいい。ジャンルにこだわるのはよくないと思います。何々系の作家になることを目指すのではなく、自分自身を一つのジャンルとして、いろんなものが書ける作家にならないとあとが大変です。デビューする前に自分の得意なものなんてわかるはずもないしね。

影響を与えた小説を遡る

——石田先生は選考委員もされていますが、受賞するポイントがありますか。

単純に言えば文章がうまい人です。文章が下手だと、いくら内容が面白くても最終選考まで残るのは難しい。そして、文章がうまくならないなら、本を読んでほしいですね。流行作家だけでなく、ほかに良い小説が山のようにありますから。最近の作家志望者は全然読んでいないですね。

——プロ作家を目指す人におすすめの読書方法がありますか。

時系列を遡って読んでほしいですね。たとえば、東野圭吾さんのミス터리を読んでよかったら、その作品の元になっている作品、影響を与えた作品は何かと

考え、それを読む。それを続けていって、最終的にエドガー・アラン・ポーまで行き着く。音楽でも最近はずばを視聴して1曲だけ買って終わりという人が多い。

でも、ロックが好きなら、そのバンドに影響を与えたバンド、そのまた前のバンドというふうに遡っていく。ブルースやジャズにもいく。そうやって聴く耳を高めるんです。小説家も同じです。読まない作家は世界も想像の幅も狭いから伸びない。デビューできて10年続かないと思います。

——プロになれる人ととなれない人の差はなんだと思われませんか。

オリジナリティーですね。流行の作家に憧れて、その人を指すようではダメ。同じ作家は二人は要らない、存在価値がないんです。最近の新人作家は品が良くおとなしい印象を受けますが、ドアを蹴破って入ってくる人じゃないと。厳しいうちですが、受賞してデビューすればなんとかなるだろうという感覚では生き残れません。

——オリジナリティーを持つにはどうすればいいのでしょうか。

自分に何があるかはやってみないとわかりませんが、真剣に取り組めばどんな世界も自分の世界になってしまうんです。恐れず何にでも挑戦してみ、選考委員に見極めてもらうくらいの気持ちでいいんじゃないかな。

——ほかにプロを目指すうえで大切なことはありますか。

ロリン・マゼールという8歳でデビューした指揮者がいるんです。子どもものちはかわいい、天才だと注目されたのに、15歳になったら仕事がなくなってしまうんです。でも彼は、仕事がない間もフルブライト留学の資格をとってイタリアに行き、22歳のときに、あることをきっかけに復活します。彼は生き残れた理由について、「15歳で一度ドン底に落ちたから、もしデビューできても自分の才能をあまりシリアスにとらえないほうがいい」と言っています。そういうバランスも大事だと思いますね。

経験はすべて素材となる

——デビュー前に小説を書くための練習はされていましたか。

小説家になるための特別な練習よりも、これはなぜこうなんだろうといつも考え続ける癖がついている人が作家に向いています。僕自身、学校に行かず留年していた時期がありました。外にも出かけず離人症みたいになったこともありましたが、そのとき、膨大な日記を書いて自分と徹底的に向き合った。作家以前に、自分とは何か、社会とは何かを深く考えぬいた。そういう経験が作家になるうえで大事だと思いますね。



——今までの経験や思索が作家としての土台になるのでしょうか。

それも含めて日常が大事です。デートしたり、食事をしたり、初恋の人に振られたり。普通のことを丁寧にやっていく。それが無駄にならないのが小説のいいところ。すべての経験が使えるんです。四六時中何か面白いことがないかと考え、面白いことは記憶する。それがファイルになって、書きながらいろんな状況を瞬時にピックアップし、次々と世界を立ち上げていく。スイッチを切ると言う人もいますが、プロは24時間休みません。サメみたいに泳ぎながら眠っています。寝ている間もストーリーを考えています。だから締切間際になってまだストーリーが

直木賞受賞作『4TEEN』



続編『9TEEN』



浮かんでいなくても、朝起きるとちゃんとできています。

——最後に作家志望者にメッセージをお願いします。

小説の世界は大きな家みたいなもので、次の世代が次々と生まれてこないとつぶれてしまう。力がある作家が集まると全体が豊かになるので、他の作家も恩恵を受ける。いい仕事をしている新人を先輩作家は応援します。だから怖がる必要はないんです。新人でも大家でもドストエフスキーの本でも、書店に並べば誰の本も同じ。普通感覚で日々を丁寧に生き、物事をニュートラルな目で見て、何があっても淡々と書いていける人、そういうプロを目指してください。

山本文緒

運は平等、まずはやってみる



山本文緒（やまもと・ふみお）1987年『プレミアム・プールの日々』でコバルト・ノベル大賞の佳作を受賞し、少女小説の作家としてデビュー。'92年より一般文芸に移行。'99年『恋愛中毒』で第20回吉川英治文学新人賞受賞。'01年『プラナリア』で第124回直木賞受賞。『アカペラ』（新潮社）、『カウントダウン』（光文社）、『ひとり上手な結婚』（講談社）など著書多数。

少女小説で学んだ小説の手法

——山本先生が小説家を目指されたきっかけを教えてください。

一人暮らしをしたくて、そのための足しにしようと思いました。

——なぜ小説を選んだのですか。

本当は漫画家になりたかったんですが、なにしろ私は絵が描けない。でも、お話をすることはできたし、小説は初期投資もいりませんから。自分には何ができるかを考え、消去法で残ったのが小説だったというわけです。

——それで公募ガイドを見て、コバルトに応募されたわけですね。

それまで小説を書こうと思ったことは本当になくて、どんな賞があるかも知らなかったんです。そんなとき、公募ガイドを知って、まずはどんな賞があるのかを調べました。

——応募する賞を吟味した？

ただ、当時は純文学とエンターテインメント小説の違いもわからない状態でした。コバルト・ノベル大賞を選んだのは、枚数が100枚とちょうどよいのと締め切りが近かったからでした。

——賞の傾向は分析されました？

特別なことはしていません。賞を知ってから初めてコバルトという雑誌を知り、こういうのなんだと驚いたぐらいですから。だから一回目の応募で佳作に選ばれたなんて思ってもみませんでした。入選したときは、私以上に家族や周りの友人が驚いていましたね。

——初めて書いた小説で入選した理由はなんだと思いますか。

運が大きかったと思います。当時少女小説がブームで作家不足だったという背景もあります。今はライトノベルというジャンルが確立されていますが、当時はなかったんです。少女小説は小さいシェアだったので、私にもチャンスが来たのではないのでしょうか。

——デビュー後、いきなりプロとして小説が書けたのですか。

最初は全然わからなくて、幼稚園児に

教えるように編集の方が丁寧に指導してくださいました。そこで、お話の作り方や、オチをつける手法など、エンタメ小説の書き方を学びましたね。

短編を丸写しして書き方を学ぶ

——アマチュアの方に有効な小説の勉強法はありますか。

書き始めた当初は、語彙もなくテニヲハもむちゃくちゃだったので、作家の方の短編をかなり写しましたね。自分では写経と読んでいたんですが、20枚くらいの短編を丸ごと写すんです。すると、構成ってこういうものなのかとよくわかる。気持ち落ち着くこともあって、楽しかったですね。今でも時々やります。

——デビュー後、着実に作品を生み出し、活躍されましたね。

そんなことはありません。デビュー後、3年くらいで私の少女小説は全然売れなくなり、食べていけなくなるんです。

——どうされたのですか？

新人賞を取り直して再起を果たさなければいけないと思い、また公募ガイドを買い始めました。

——それで応募はされました？

応募しようと思っていた矢先、フリーの編集の方から大人向けの小説を書いてみないかと声がかかったんです。ちょうど一般文芸のほうで書きたいという気持ち

公募ガイドを見て応募した作家たち

みんな昔は一読者だった

文壇には先輩がごろごろ

ひとくちに本誌読者といっても、毎号のように本誌を買い、公募情報を見るだけでなく、連載や読者コーナーなども読んでいたヘビューザーもいれば、気が向いたときとときどき買う、あるいは、新人賞に応募するために一度だけ買ったという方もいます。

熱心な愛読者から生まれた作家としては、湊かなえさんがいます。湊さんはアマチュア時代、本誌の川柳募集「心理学五七五」に採用され、柏田道夫先生がやっていた「シナリオ実践教室」でも佳作に選ばれています。直木賞作家の村山由佳さんも、デビュー前は熱心な読者だったそうです。

日本ホラー小説大賞長編賞を受賞した館村行さんは、20年も本誌を購読しているとか。おもしろいのは、プロになった今も購読していることで、その理由は、「読者投稿ページに目を通すと、すごくやる気が出る。がんばらなきゃって励まされるんです」とのことです。

本誌がきっかけでプロに

では、アマチュア時代に本誌を読んでいた方々のコメントを紹介しましょう。

【桐野夏生】 江戸川乱歩賞

友人は、これこれこういうのがある、と電話口の向こうで『公募ガイド』を読みながら言った。長編がいいかも、とつぶやくと、彼女はファックスで『江戸川乱歩賞』の部分を送ってくれた(本誌93年10月号)

【村山由佳】 小説すばる新人賞

毎月9日になると、本屋へ行った。買ってきた『公募ガイド』を隅から隅まで読んで、自分のアンテナに引っかかるものを選び出す(本誌94年3月号)

【川上弘美】 バスカル短編文学新人賞

『公募ガイド』を買ったことが今までに一回だけある。仕事をやめ、結婚した直後である。「さて暇になったから、投稿なるものをしてみようか」という動機であった(本誌94年7月号)

【福井晴敏】 江戸川乱歩賞



内藤みか (2008年6月号)
撮影 フラッグ



森絵都 (2012年1月号)
撮影 元田敏三



村山由佳 (2012年3月号)
撮影 賀地マコト



荻原浩 (2011年4月号)
撮影 沼尻年弘



岩崎夏海 (2012年2月号)
撮影 工藤憲二



湊かなえ (2009年10月号)
撮影 山田なおこ

普段は何でも立ち読みで済ます男が、その時は珍しく買って帰り、応募原稿の綴じ方から名前の書き方まで、すべて公募ガイドさんのお世話になって、それから五ヶ月後、江戸川乱歩賞に初の応募をした(本誌98年11月号)

【山本文緒】 コバルト・ノベル大賞 佳作

立ち寄った本屋で、公募ガイドを手に取って、「こんなものがあつたんだ」と思い、一番締め切りが近かったコバルト・

ノベル大賞に応募したんです(本誌2000年10月号)

【高野和明】 江戸川乱歩賞

手元に『公募ガイド』があります。二〇〇一年二月号で、乱歩賞に応募する際に買い求めたものです。ほんの半年前は、自分も、今この記事を読んで下さっている方々と同じく、野心と夢想に取り憑かれて原稿と向き合っていました(本誌2001年9月号)

【森絵都】 講談社児童文学新人賞

私も学生時代は『公募ガイド』は毎月読んでいました(本誌2003年6月号)

【石田衣良】 オール読物推理小説新人賞

僕のとときには既に「公募ガイド」という便利なものがありましたから、順番にマルをつけていったんです(文藝春秋のWEB対談より)

【熊谷達也】 小説すばる新人賞

五年間は仕事をしながら新人賞に挑戦しようと思って、その足で本屋さんに公募ガイドを買いに行きました(2006年の産経新聞より)

【荻原浩】 小説すばる新人賞

公募ガイドを見て、「一番締め切りが近い賞はどれかな」と……。当時はミステリーが全盛で、純文学系以外のノンジ



川上弘美 (1994年7月号)



桐野夏生 (1993年10月号)



大崎梢 (2007年11月号)



長野まゆみ (2011年9月号)
撮影 元田敏三



本多孝好 (2011年1月号)
撮影 神楽千砂



福井晴敏 (2005年2月号)
撮影 フラッグ



リリー・フランキー (2002年2月号) 撮影 工藤憲二



池上永一 (2008年11月号)
撮影 フラッグ

ヤンルの新人賞は、まだ少なかったんです。小説すばるの新人賞と、現在はもうありませんが小説新潮新人賞の二つを見つけ、締め切りの近いほうを目標にしました(本誌2007年10月号)

【内藤みか】

高校生のときに公募ガイドと出会うんです。それからは、自分が興味を持った公募を切り貼りして、締切順に並べ替え、絶対応募したいものには花丸、気になるものには△なんて印を付けて整理しました。(本誌2008年6月号)

ほか、「かつては公募ガイドを読んでいた」「公募ガイドを見て応募した」という作家の名前を挙げると……。 (以下、敬称略) 高嶋哲夫、長野まゆみ、

次に夢を叶える読者は誰？

花村萬月、大石直紀、柳広司、戸梶圭太、本多孝好、橋本紡、大崎梢、米村圭伍、森昌磨、岩崎夏海、牧野節子など。これ以外にもわかつているだけで30名ほどおり、編集部では、新人賞でデビューした作家の7割は、一度は公募ガイドを買ったことがあると見ています。

公募に応募する読者に共通するのは、やはり夢ではないでしょうか。リリー・フランキーさんは、夢と本誌について、以下のようにコメントしています。「べつにイラストレーターを目指していたわけじゃない。営業しなかったし、『公募ガイド』は愛読書だったけど、応募し

たことはなかった。20万円とか50万円とか、1カ月暮らしていける賞金の情報を眺めて、もらった気になってうっとりしてたよ。今でも読むけど、『公募ガイド』は絵に描いた餅を食べるための本だから、楽しいよね。夢を見れるよ」(本誌2010年6月号)

夢に向かって猛進できる人もいれば、いつかは思いながらなかなか一歩が踏み出せない人、あるいは、仕事や家庭の事情のため日々の暮らしに流されてしまっている人もいます。でも、今年こそ行動に移しましょう。念願の賞を獲りにいきましょう。そして、名だたる先輩読者に続いて夢を叶え、皆さんも受賞者として本誌誌面に戻っててください。ぜひ。

高野 和明

報われない時代に力を蓄える



高野和明（たかの・かずあき） 1984年、岡本喜八監督の門下となる。その後、ロサンゼルス・シティカレッジで映画の撮影・演出・編集を学び、帰国後、フリーランスの脚本家としてデビュー。'01年、小説『13階段』で第47回江戸川乱歩賞受賞。'11年『ジェノサイド』で第2回山田風太郎賞、第65回日本推理作家協会賞受賞。

映像化できないことを小説に

——高野先生はもとも映像業界で活躍されていたようですが、制作の現場に入ったきっかけは？

実は映画監督を目指していて、高校卒業後、浪人時代に城戸賞（脚本の公募）に応募しました。運よく最終候補に残り、あるプロデューサーが岡本喜八監督を紹介してくれたんです。それで岡本監督に弟子入りし、映像の現場で仕事をするようになりました。

——その後、海外の映画学校に留学された理由はなんですか。

ハリウッドの映画関係者のインタビュー

——などには、大事なのはストーリーテリングだと必ず書かれています。そのことを学びたかったし、物語というものの基礎を知りたいという欲求が高まり、海外へ飛んでいきました。

——帰国後、フリーで脚本家の仕事をさせていますが、小説家に転身するきっかけはなんだったのですか。

脚本家としてはデビューできましたが、映画監督になるチャンスはありませんでした。この当時、宮部みゆきさんの『魔術はささやく』と『火車』に大変のめりこんで、自分も小説を書いてみたいと思っただけです。それまでにストックしていたアイデアの中には映像化できないものもありましたし、小説でしかできないことをやろうと思いましたが。

——賞はどうやって選ばれたのですか。

また、傾向は分析されましたか。賞に合わせたのではなく、先に作品ありきですね。分析もしていません。その頃は仕事が多かったので1作目は1年かけて750枚の長編、続いて450枚の作品と短編2編を書きました。当時は公募ガイドをいつも読んでチェックしていましたね。

——いきなり小説を書かれ、しかも長編ではハードルは高くなかったですか。

脚本家は企画段階でストーリー案を小説形式で書かれます。その膨大な経験があったので、小説を書くことにそんな

違和感はなかったですね。

——その後、5作目の『13階段』を書いたきっかけはなんですか。

直前に『グラウエンの鳥籠』というインターネットドラマの脚本を書いていました。その中に登場する脇役の刑事は、凶悪犯を死刑台に叩き込むのが生きがいです。このキャラクターを掘り下げていくうちに、死刑制度についても突っ込んで書きたいと思うようになりました。それがきっかけです。

——わずか2カ月でどうやって書きあげたのですか。

まず、それ以前に2週間ほどの資料調べの期間がありました。執筆期間中、24時間意識的に作品の世界だけを考えていました。ストーリー、構成、キャラクターなどあらゆることを考える。それを続けてある一点を超えると、洗濯をしてもテレビを見ていても、自動的に作品のことを考えていられるようになります。2カ月そういう生活をしていましたね。

——その結果、小説を書くきっかけとなった宮部みゆきさんに講評してもらえませんか。

尊敬する宮部みゆきさんを含め、5人の作家の方に読んでいただけたのがすごくうれしかったですね。ただ、うれしかったのは最終候補に残ったからの1カ月だけで、受賞後は「本当に受賞してしま

った。これは大変なことになった」と気が動転して喜ぶどころではなくなりましてだけどね。

映画を見て構成表を作る

——ミステリーを書くコツは？

アマチュアの方がよく誤解することですが、序盤で謎をばらまこうとするのは間違っています。序盤では、解決すべき謎を絞り込むことです。殺人事件が起これば行きずりの殺人から計画殺人まであらゆる可能性がありますが、物語の中でどの謎を追求するかをはじめに限定します。そうすることで、読者は思考を整理して謎解きを楽しめるんです。

——構成はどのように考えますか。

オープニングとエンディングをまず考え、行けそうだとしたら4、5カ所の中継ポイントを作ります。決めておくのはそれくらいです。三幕法や起承転結を意識して整合性を求めすぎるとよくないと思います。これもアマチュアの方がよく誤解することですが、起・承・転・結と四分割で考えたりはしません。

それから、すべての場面がクライマックスを盛り上げるために機能しているかどうか。そうなっているのが理想です。

——学生時代から映画をよく見て分析されていたそうですが、その方法を教えてください。

1回目は分析せず純粹に楽しみます。そして面白ければ、同じ映画館の同じ場所に座り、もう一回見ます。すると最初に映画を見たときの、自分の細かい心の動きが再生されるんです。ミステリーなら、こいつが怪しいとなぜあのときに思わされてしまったのか、作り手の仕掛けた技術がわかってきます。

——ほかに小説を書くうえで役立つ勉強法はありますか。

好きな作品の構成表を作るのも効果的です。普通はプロットから映画を作りますが、完成した映画から逆にプロットを作りなおしていきます。映画の場合は縦軸を時間軸とし、その横にシーンごとの内容を書き出していきます。小説の場合は縦軸を枚数にします。そうして書き出してみると、どこに伏線があつてどこに繋がっているか、それが成功しているかどうかもつかめます。ストーリーとドラマの違いもはっきりわかります。

ストーリーとドラマは違う

——高野先生が考えるストーリーとドラマの違いとはなんですか。

ドラマとは登場人物の人間性が発揮される場面です。黒澤明の映画『七人の侍』でいうと、島田勘兵衛が農民を助けるか助けないか、迷っている間はストーリーが動かない。その間、勘兵衛の心の中、

葛藤が描かれますが、これがドラマです。その後、勘兵衛は農民の頼みを断って去ろうとしますが、予想外の別のドラマが起こつて引き受けることになりました。これでストーリーが進むわけですね。

——小説でもストーリーとドラマを意識して書くことが重要なのでしょうか。

ストーリーの類型は二種類しかなく、それは階段型とトンネル型です。『七人の侍』は、野武士が来るまでずっとストーリーが動かないのでトンネル型ですね。また、『13階段』のような謎解きは、手掛かりをつかむたびに一段一段クライマックスに近づく階段型です。ストーリーが動く場面と、動かない場面というのは、意識的に考えておかないとテンポが悪い作品になりますね。

——2011年に出版された話題作『ジェノサイド』を書かれたきっかけはなん

『ジェノサイド』（角川書店刊）
研人のもとに死んだ父からのメールが届く。傭兵イーガーは不治の病を患う息子のためにコンゴ潜入の任務を引き受ける。二人の人生が交錯するとき、驚愕の真実が明らかに。



ですか。

20歳の頃に読んだ立花隆さんの本に、ある生物進化の可能性が書かれていました。当時の常識ではそんな生物がいきなり生まれるはずがないとされていましたが、その後の生物学の進歩で、あり得るのではないかと思えるようになりました。2000年代前半に友人にアイデアを話すと、面白がつてくれ、ぜひ書くべきだと薦めてくれたんです。私自身も、今書かなきゃという思いが高まって書いた感じですね。

——プロになるために大切なことはなんだと思われませんか。

原稿を書くときだけ一生懸命な人は、試合のときだけ頑張ろうとする運動選手と同じでダメです。ふだんから何を讀み、何を考えるかで勝負が決まります。ただし、ある程度、筆力がつくと技術に甘んじやすいので、「これを書かずに死ぬるか」というパッションも必要ですね。それは必ず作品の力となります。

——作家を目指す読者にメッセージをお願いします。

初めて書いた作品で運よくデビューできても、プロとして長続きしないとダメです。デビュー後、プロであり続けるのが難しいので、報われない時代にこそ力を蓄えるべきですね。間違った努力をせず、正しい努力とは何かを考えて頑張ってください。

乃南 アサ

その時代を生きる人間を描く



乃南アサ (のなみ・あさ) 1988年『幸福な朝食』で日本推理サスペンス大賞優秀作を受賞。'96年に『凍える牙』で第115回直木賞受賞。'11年に『地のはてから』で第6回中央公論文芸賞受賞。『ウツボカズラの夢』(双葉社)、『ニサッタ、ニサッタ』(講談社)、『すれ違う背中を』(新潮社)、『地球の穴場』(文藝春秋)など著書多数。

読者が楽しんでくれたらいい

——乃南先生は初めて応募した作品で受賞されています。いきなり小説を書くことはハードルが高くなかったですか。

以前から小説家になりたくて、始めるきっかけを探していましたし、怖いもの知らずでしたね。

——傾向と対策を分析されたりは？

まったくしませんでした。日本推理サスペンス大賞に応募しようと思ったときは、ミステリーの意味もサスペンスの意味もわからず、友だちに聞いて、それから急いで松本清張さんの作品を読んで、小説とはこういうものかと思いつきながら書

きあげたくらいですから。

——初応募で受賞され、プロデビューを果たします。順風満帆ですね。

その頃は1年以内に受賞後第1作を出版するのが通例でした。でも、私の場合はそれまでの蓄積がゼロですから、書くものもすごく苦労しましたね。担当編集の人にも、当時は「下手だ」と言われました。

——受賞後に作家修業をするという感じでしょうか。

当時は景気がよく、雑誌の数も多かったので、新人作家はまず短編小説を書くのが一般的でした。短編のお仕事をいたしながら、一作一作勉強していくという感じでしたね。

——ミステリーやサスペンスの手法も、デビュー後に確立されたのでしょうか。

ミステリーやサスペンスの定義がよくわからないままデビューし、いまだにわからないままです。でも、それでいいと思っています。

——乃南先生の作品は謎解きより人間ドラマに主眼がありますよね。

デビューしたときから変わらないうのは、その時代と時代を生きる人間を書きたいということなんです。私にとって一番の謎は人間で、人が思わずとっってしまう行動に興味があるんです。

——構成はきっちり立てるほうですか。立てないですね。決めるのはテーマが



『白自 刑事・土門功太郎』(文春文庫、2月刊)

らいで、ストーリーも何も決めません。デビュー当時はハコ書きや梗概を作りなさいと言われたこともありましたが、私には向いていませんでした。旅に出るとき、行く前からきっちりスケジュールを決めると、旅そのものが計画の確認作業みたいになりますよね。私は旅行でも乗り物と宿以外は何も決めないたちなんです。きちんと決めると息苦しくなるんですね。それと同じで、連載小説の場合も先に決めるのはタイトルだけです。

——キャラクターはどのように造形していきますか。

それも特別組み立てないんですよ。テーマと時代が決まってくると、登場人物はなんとなく見えてくるんです。

——こんな人物がこんなことをして、とあらかじめ決めておくのではなく？

私が書いた人物ではあっても、私は別の人間だと思っています。だから、私の思うようには動かないんです。私は客観的に人物を見て、その生活や人生を写しとっている感じですね。

——では、書いている時間と考えている

時間とではどちらが多いですか。

圧倒的に考えている時間です。

短編を書く力は確実につく

——プロの小説家を目指す方へおすすめ
の勉強法はありますか。

短編を書かないと、小説は絶対上手にならないと思います。短編は一枚の写真のようなもので、長編は長尺で撮っているビデオのようなもの。長ければダレたところがあっても目立たないかもしれないが、短いとさつちりピントを合わせないとダメなんです。30〜40枚の作品を10〜20本書くと、構成力をはじめ、小説を書くすべての技術が確実に上がります。

——推敲のコツはありますか。

覚えておいたほうがいいのは、気に入っているところほど、人が読むと不愉快に感じるということ。そういうところは自分に酔いしれて書いていることが多く、はたから見るとクサクかったり、邪魔になつたりするんですね。気に入っているところほど冷静に見て、時には思いきって捨てることも必要です。私もデビュー当時は半べそをかくくらい編集者に原稿を削られましたね。

——今年度からオール讀物新人賞の選考委員をされますね。受賞のポイントなどはあるのでしょうか。

上手下手よりも、最終的には執念や熱のこもった作品が選ばれると思います。



お行儀よくまとまったものより、ちよつと破綻があつても非常にエネルギーがある方に惹かれるし、そういう人のほうがあとあと伸びるんです。それはテーマではなく、どれだけ作品に真剣に取り組んでいるかなんです。完成度を上げようと変にいじくるよりは、勢いをぶつけたほうが有利だと思います。

——オール讀物新人賞に応募するには、応募券が必要になるとか？

新人賞に応募するのに、文芸誌を見たことがない方が多いようですね。目次を見るだけでも、それぞれのカラーや違いがわかります。賞の母体となっている文芸誌ですから、一度は読んでおくべきですね。

何度も挑戦する粘り強さが必要

——最近の応募者に傾向はありますか。

最近みんな打たれ弱いですね。一度の落選でもすぐにしゅんとなくなってしまいうちも少し頑張れば大丈夫だとアドバイスしても、諦めてしまう人が多いですね。最終選考まで残りながら何回も落ちて、途中息切れしたときもあるけれど、また頑張つて、結果デビューした人もいます。そういう打たれ強さ、しつこさも大切だと思います。

——乃南先生にとって小説家とはどんな職業ですか。

終わりがいい職業ですね。長編1本書いて、やったーと思つてもゲラが来て、すぐに直さないといけない。今度こそ終わるかと思うと、また再考すべきところが出てくる。達成感からすぐ逆戻りしなきゃならない。連載だと長いスパンでこの状態が何年も続くわけです。やるときは次の作品に行つていけないといけない。しかも一人でやる作業です。非常に盛り上がるの孤獨な職業です。

——好きでなければできない職業ですね。現在連載中の作品やこれからのご予定はありますか。

小さなお子さんでもお年を召された方でも読んでいただける作品を書きたい、そういう思いから、『オール讀物』で日本の昔話をリメイクした小説を年4本ずつ書かせていただいています。みんなが知っているお話だけど、改めて読むとまた違った感じができるんじゃないかと思えます。また、今年から長編の連載に入るのでその下準備をしています。

——最後に作家志望者にメッセージをお願いします。

作家になりたいから小説を書くのか、それとも小説を書きたいから作家になろうとするのか。このどちらを選ぶかでその後の人生は大きく変わると思っています。どちらがいいかは……作家志望者自身が自分で考えるべきことですね。